

サビエル生誕五百年



## 隠れキリシタン（上）

上五島・長崎巡礼⑩

「隠れキリシタン」  
…何か幻想的な響きがあり、私にはこの人たちへのあこがれにも似た気持ちがある。これまで何度も「隠れキリ

シタン」という言葉を使ってきたが、この言葉には私が使用した以外の意味もある。キリスト教に対する江戸時代の厳しい弾圧

のもとで、仏教徒のふりをしながらも密かに信仰を守り続けた人たち。当時をしのばせるものの一つ「マリア観音」は隠れキリシタンが観音像と見せかけながら拝んだマリア像である。

明治六年、ようやく

教会に戻った信徒を「復活キリシタン」という。

しかし、生月、平戸、五島などの離島の隠れキリシタンの一部は禁教令撤廃後もカトリック教会には戻らなかった。

神父不在、信徒だけで独自の組織をつくって二百五十年間信仰を守り続けるうちに、正統なカトリック信仰とは異なるものになっていった。そのカトリック教会に戻らなかった人たちを「カクレキリシタン」といい、禁教下の「隠れキリシタン」と区別するため片仮名で表示している。

マリア観音像（二十六聖人記念館蔵）



キリシタン禁教令が撤廃され、二百五十年という長い歳月を潜伏していた長崎の隠れキリシタンの多くは神父が司牧するカトリック教会に戻った。専門的にいえば、禁教令下の信徒を「潜伏キリシタン」「カトリック

隠れて信仰を守るの

ものの、数は減少しているという。なお、ある方から「隠れキリシタンが教会に戻った際、なぜカトリック教会だけに戻ったのか。プロテスタント教会もあるのに」と質問された。

確かに現在、キリスト教はカトリック教会とプロテスタント教会とに分かれている。それは中世の宗教改革以後のことであるが、日本にキリスト教を伝えたサビエルはカトリック教会の修道会の神父で、その後続いて来日した宣教師はすべてカトリックの聖職者である。

つまり、江戸時代のはキリスト教信徒（約三十万人いたといわれる）はすべてカトリック教会の信徒なのである。禁教令下で潜伏し、隠れキリシタンと呼ばれた人たちが禁教令撤廃後にカトリック教会に戻ったのは当然のことといえる。

プロテスタントの外国

人宣教師が来日したのは徳川幕府の鎖国政策が改められてからである。ちなみに昨年、二〇〇九年に日本へのプロテスタント宣教百五十年の祝いが開かれた。

カトリック教会は昨年で日本宣教四百六十年となり、その半分以上が迫害と殉教の歴史であり、隠れキリシタンはその申し子ともい

える。

先日、復刻版が出版されたばかりの「キリシタン 迫害と殉教の記録」全三巻を買い求めて読んでいたが、隠れキリシタンたちの筆舌に尽くし難い艱難（かんなん）辛苦に身が引き締まる思いがする。（元山口放送取締役ラジオ局長）

「キリシタン 迫害と殉教の記録」

